みちくさ

2017.3.8　No.42

震災を振り返る集会にて

あの震災から，もう 6 年です。この時期になると，必ず学校では「震災からの復興」への気持ちを大事にし，全校集会をしております。今月の 11 日が土曜日になっているので，少し早かったですが，7 日（火）に行いました。

校長として子どもたちに話す時間をいただいたので，ある子どもの作文を読みました。

実は，前任校の愛子小学校では，父親を津波で亡くした子どもがおりました。たまたま父親の勤務地が多賀城にあり，そこで被災をしたようです。愛子に私が在任していた間も，時々体調を崩して休むこともあったのです。普段はとっても元気な明るい子だったので，そういうときには担任から報告を受け，とても心配しておりました。

作文宮城の特別編第 2 集が最近届きました。これをぱらぱらと眺めていたところ，当時，3 年生だったこの子の作文が載っておりました。読んでいるうちに，あの時はぎりぎりで辛かったんだろうなと，本当に改めて思いました。

とてもうれしかったのは，この作文宮城には，当時を振り返り，現在の子どもがコメントを寄せている部分があり，この子の作文にも，現在中 1 になって元気に頑張っていると添えられていたからなのです。当時の担任に電話して改めて聞いてみたところ，バドミントン部に入って頑張っているとか，この冬は書き初めで賞状をもらったとか，いろいろな情報をいただきました。

担任しているわけではないので，その後の情報が分からず，時々気になっていたんだけれど，やっと安心出来ました。集会では，この作文と現在のコメントを読み聞かせ，震災で亡くなった 15000 名余り，行方不明 2500 名余りの人たちに対して，黙祷を捧げました。

心のカーネーション

愛子小では，またこんな事もありました。ちょうど今頃になるとカーネーションを持参してくださる方がいらっしゃいました。最初はそのいきさつなども知らなかったのですが，このことも震災当時に関係しておりました。

青葉区西部にある愛子小ですが，震災当時はほとんど地盤崩壊もなく，避難所開設後もすぐに住民は戻っていく状況だったそうです。でも名取地区から，愛子小の体育館に避難された方々がいらっしゃったのです。

カーネーションを育てていた農家の　　さんは，津波に流されるも，流れてきた丸太にたまたまつかまり，仙台東部道路の土手まで流されてそこで流れが止まるという九死に一生を得た凄い体験をしました。当然全身ずぶ濡れの状態で，なんとか高速道路の上まであがると，そこにバスがやってきたということです。

バスに拾われ，とにかく海から離れたいということで，高速道路を辿って，48 号線を山形方面に進んでいくうち，たまたま愛子小の体育館が見えたので，そこで下ろしてもらったということです。

愛子小の体育館も真っ暗な状況でしたが，とにかく濡れている衣服を取り替えないということで，当時の職員がみんなで協力し，ジャージやジャンパーなどを貸して，なんとかその日は乗り切ることができたということでした。数日後に　　さんは名取に帰って行きました。

それから，毎年卒業式の頃になると，　　さんからお礼の気持ちを込めて，育てたカーネーションが届けられるようになりました。愛子小では「心のカーネーション」として，感謝の意味を込め，卒業式には教室等に飾っておりました。

このような話は本当に一例だと思います。あの日，仙台や宮城，東北の各地では，いろいろなドラマがあったのです。震災を風化させたくないし，子どもたちにも二度とあのような思いをさせたくありません。